

石井勇義と牧野富太郎の友情
—練馬区立牧野記念庭園記念館の企画展を開催して—

田中 純子
(練馬区立牧野記念庭園記念館学芸員)

The Friendship between ISHII Yugi and MAKINO Tomitaro

TANAKA Junko

Abstract

In March last year, the Museum of the Memorial Garden for Makino Tomitaro (Tokyo, Japan) held an exhibition for displaying 63 drawings of Tsubaki and Sazanqua, which are traditional Japanese flowers. The drawings were done by an artist Yamada Toshio (1882-1941) when Ishii Yugi (1892-1953) was planning to publish a booklet of the plant drawings in 1930's. Ishii was a horticulturist as well as an editor of horticultural magazines at that time and he might be introduced to Yamada by Makino Tomitaro (1862-1957). Makino was a well-known botanist and a botanical illustrator and his achievement in botanical science has become a backbone of plant taxonomy in Japan. Besides their backgrounds, the Yamada's drawings are supposed to be related to a deep friendship between Ishii and Makino. In this article, the background of their friendship is described, together with some episodes related to the plant drawings.

はじめに

下に掲げた写真(図1)に写る二人の男性のうち、向って右が石井勇義(1892-1953)、左が牧野富太郎(1862-1957)である。正装した男性が二人仲良く写真に納まり、しかも写真館で撮影された、台紙付きの立派な写真である。



図1 石井勇義と牧野富太郎の写真

石井は、雑誌『実際園芸』（1926～1941年）と『農耕と園芸』（1946年～）の創刊、『原色園芸植物図譜』（1930～1934年）や『園芸大事典』（1～4巻は1944～1953年、5・6巻は没後の1955・1956年）などの編集、及び教育活動を通して園芸界の発展に貢献した園芸家。牧野は、明治以降発展する植物学の基礎を築いた一人で、植物分類が専門であった。この写真に関して撮影年月日や経緯などは不明であるが、なにかの記念に撮ったことは間違いないであろう。二人の非常に懇意にしていた間柄を感じさせる一コマである。

二人の写真をここに掲載するに至ったのは、私が勤務する練馬区立牧野記念庭園記念館（以下、記念館と略す）にて、「ツバキ・サザンカー石井勇義と牧野富太郎の友情」（会期：2015年2月28日～3月29日）という企画展を開催したことがきっかけである。この企画展の主眼は、石井勇義が図譜制作を企画しその依頼を受けた山田壽雄（1882-1941）によって描かれたツバキ・サザンカの図63点を展示することであった。国立国会図書館より借用させていただいたこれらの図¹⁾は、1989年（平成元）に石井の長女である富本美代子氏によって寄贈されたものである。また、石井に関連する資料として、雑誌『実際園芸』を恵泉女学園・花と平和のミュージアムから借用させていただき、石井の執筆したツバキの品種解説や牧野を中心とした座談会の対談内容を載せた頁を展示することができた。さらに企画展付随イベントとして、恵泉女学園大学名誉教授箱田直紀氏に「ツバキ・サザンカの魅力と石井勇義」というタイトルで講演をしていただいた。

図1の写真は、富本氏の手元に置かれた石井の遺品の一つで、そのなかには、牧野と一緒に写ったものがこれを含めて3枚あった。また、牧野から石井に宛てた書簡類も、石井の孫である目黒美佳氏が保持されていた。ざっと数えてみたが、280ぐらいいはある。かなりの数である。本企画展展示のため

借用させていただいた、石井のご子孫が所持されているこれらの資料から、石井と牧野との交友関係が非常に親密であったことが明らかになった。こうしたことにより、二人の交流の跡を記録にとどめるべきではないかと考え、今回寄稿させていただいた次第である。

本稿では、最初に石井とツバキ・サザンカの図譜について、次に石井と牧野の交流について、という順で話を進めていきたいと考える。なお、本企画展準備及び本稿執筆にあたり、津山尚が編纂した『石井勇義 ツバキ・サザンカ図譜』(1979年)を大いに参考にしたことを断っておく。この本の解説がなければ、石井のツバキ・サザンカ図譜制作事情についても山田壽雄という人物についてもほとんどわからないままであったと言っても過言ではない。

1 石井勇義とツバキ・サザンカ図譜

石井について、今となってはその名を知る人が少なくなってしまったと、津山は『石井勇義 ツバキ・サザンカ図譜』のなかで述懐している。その編纂からさらに35年以上経った現在にあってその感がより一層強くなったのであれば、それは残念なことと思われる。しかしながら、記念館で本企画展を開催中、石井勇義に関心をもっておられる方が何人も来館されたことは喜ばしいことであった。

石井の生涯やその功績については、津山が『石井勇義 ツバキ・サザンカ図譜』のなかで「園芸家石井勇義の生涯」として詳細に述べているので繰り返しは避けるが、石井の功績は、はじめに述べたように雑誌・事典などの執筆や編集における活躍であった。こうした活躍を通して、石井は、園芸愛好者に親しまれ、園芸知識の普及に尽力した。その功績について、遊川知久氏は、「日本と世界を見つめた3人の園芸家」のなかで日本の園芸の国際化に貢献した一人として石井を取り上げ、「情報国際化のパイオニア」として的確に評価している²⁾。また、教育活動においては、恵泉女子農芸専門学校(後の恵泉女学園短期大学)や青山学院女子専門部(後の青山学院女子短期大学)で園芸学を教えた。前者の設立に寄与したことは、私がここで述べるまでもないことである。

日本の園芸の発展に大きく貢献した石井について、牧野はその編集能力を

非常に高く買っていた。そのことを示す文章を以下に掲げてみよう。

『『実際園芸』の編集主任で園芸界の万事に堪能な友人の石井勇義君が大に我が名の如く、義に勇まれ世人に解かり易い様に天然色の色彩写真まで入れた園芸植物の書物を拵え……て見ようという意気込み、私は此挙を聞き知って、……まだ其書の出ぬ前からもう已でに大喜びであった……此スピード時代に相応わしく早や其の本が出来たとの報らせにアツト其の速力に驚いたが愈々出来たに相違ないので早速其れを拝見するに実に見事見事!」³⁾

これは、『原色園芸植物図譜 第1巻』(1930年)において牧野が書いた序文より抜書きしたものである。牧野のテンポの良いこの文章は、石井が本をつくると決めてからトントンと事を運び手際よく出版に至った様子をうまく伝えている。

こうした石井のもつ編集の技量とその助力によって、牧野はそれまでの植物研究の集大成である『牧野植物学全集』(1934～36年 全6冊)を刊行できた。70歳を過ぎた牧野にとって全集の刊行は非常に喜ばしいことであり、この出版が認められて1937年(昭和12)に朝日文化賞を受賞したのであった。全集を出版した会社は、『実際園芸』の出版社誠文堂であった。石井の仲介によるのは間違いない。また、『原色野外植物図譜』(1932-33年)についても、誠文堂より出版したこの本の原稿を石井の子孫の方が持っておられたことが今回の調査でわかったのであるが、石井がこの本の編集にも関わっていたことを示していよう。

さて、石井が企画したツバキ・サザンカ図譜の話に移ろう。石井は、1932、33年(昭和7、8)にツバキとサザンカの品種解説を『実際園芸』に発表した⁴⁾。これらの解説は、埼玉県川口市安行にある皆川治助の椿花園にある品種を対象としたものであった。ツバキの5回目の品種解説の最後に、石井は「文献的の調査、個体の細密なる観察と記載とを重ねて、近き将来に於て、真に実物を窺うに足り、これを海外の園芸界に示し得る原色山茶つばき図譜の刊行を企てたいと考えている」と図譜制作の抱負を語った。

このように図譜制作を企てた石井は、牧野が最も信頼していた画工である



図2 光源氏

山田に図の制作を依頼した⁵⁾。図の制作がなされた時期は、山田が受け取った、画料としての前借の領収証にある日付から1933～1936年（昭和8～昭和11）であったことがわかる。山田を石井に紹介したのは、石井の図譜計画を知った牧野であろう。山田が他の人の仕事を引き受けることを、牧野は必ずしも快く思っていなかったと津山は記している。そうであれば、牧野は石井に大事な山田を薦めたことになり、この辺りからも石井と牧野の友情の深さを推し測ることができよう。山田のツバキ・サザンカ図については、特徴が正確に描かれ容易に見分けがつく点が高く評価されている

（図2）。

図の制作と並行して、石井自身もツバキの品種の記載研究をはじめた。それは1934、35年（昭和9、10）のことであり、原稿には129番まで番号がふられるが、原稿の下端に「24、3、26採」などと1949年（昭和24）3、4月に採集したことを示す書き込みが見られる。このころにツバキの記載研究を再開したと推測されるが、継続しなかったようで完成されることはなかった。原稿（図3）の内容は、品種ごとに葉や花の各部の形状、大きさなどが記録され、写真や部分図が添えられる。石井の書いた記載文は、山田の描いた図に対応するものではないが、いずれは図と文で対になるように整えるつもりであったろう。石井の生前に出版されなかったこの図譜は、出版を期してアメリカに一時渡ったが日本に戻ってきた。そして、津山が、図と記載文を詳細に調査して『石井勇義 ツバキ・サザンカ図譜』を出版したのであった。その後、先に述べた



図3 乙女 昭和10年3月23日

ように、山田の図は国立国会図書館に寄贈された。品種を記載した石井の原稿、山田の領収証、石井が山田に依頼したツバキ・サザンカ以外の植物図(図4)など、津山が調べ記録した資料は、ほとんどすべて子孫の方が保持されておられた。

山田によるツバキ・サザンカの図は帙に収められ、その帙には、「石井勇義編 日本産ツバキの図 牧野富太郎訂」という牧野によって書かれた題簽が貼られてある。帙は、津山によれば、石井が亡くなって翌年の1954年(昭和29)に、アメリカに持って行くためつくられたということで、石井が牧野



図4 鶉ノ羽

に頼んだものではないようである。石井の家族が、故人の思いを汲んで富太郎に帙の題簽を依頼したと想像される。

石井がツバキやサザンカの図譜制作を決意した意図は何であったのであろうか。おそらく石井はツバキ・サザンカだけではなく日本の伝統的な園芸品種の記録を残そうと考えていたのであろう。というのは、ご子孫の保管されている山田の図はフジ、モミジ、ハナショウブ、モクレンなどで、ツバキ・サザンカに加えて他の伝統的な園芸植物についても図の制作を企図していたと見られるからである⁶⁾。山田の領収証からは、ツバキ・サザンカと並行してこれらの図を石井が頼んでいたことがわかる。当時、伝統的な園芸品種はあまり顧みられていなかったようで、もともとは西洋植物に関心があった石井がいち早くその状況に注目したと思われる⁷⁾。このような転換は、遊川氏が、単なる懐古趣味によるものではなく、「海外の生産技術や新品種を正確に、より早く知らせたいというビジョンと軌を一にしていた」であろうと述べているように、石井の、時代の先を行く、新たな情報源を見出す能力によるのであろう⁸⁾。

石井がツバキ研究を一生の仕事とした動機については、『農耕と園芸』(9-8 1954年7月)に掲載された石井を偲ぶ特集記事に文を寄せた、造園家井下

清（1884-1973）が、次の2点を指摘している。日本における古いツバキの図譜の存在や当時保存されていた名花に心動かされたこと、及びヨーロッパでの新品種の育成やアメリカで高まってきたツバキ熱といった海外の事情を知ったことである。また、井下は、1928年（昭和3）ごろから牧野の指示もあって石井がツバキの品種の綿密な調査と記載をはじめたことを書いている。箱田氏は、記念館で行なわれた講演会において、石井のツバキ・サザンカの品種に関する記録があったからこそ、江戸時代の品種や品種名が正確に現在に伝承されていると述べられた。

石井は、ツバキに最後まで関心を持ち続けた。すなわち、先述した、ツバキの品種記載の再開のみならず、1950年（昭和25）に文部省科学研究助成金によってツバキの葉の形態による品種の鑑定という研究に着手し、翌年『農耕と園芸』（6-4、1951年4月）に「ツバキの流行と品種」を載せ、1953年（昭和28）の日本ツバキ協会設立に尽力した。

2 石井勇義と牧野富太郎の交流について

石井と牧野は、いつごろどのようにして出会ったのであろうか。おそらく科学雑誌の主宰者であった原田三夫（1890-1977）の紹介で石井が牧野に、『実際園芸』に寄稿してくれるよう頼んだのが二人の交流のはじまりではないかと思われる。原田自身も、『子供の科学』に植物について牧野に書いてもらうことが、牧野と知り合うきっかけであったと自伝で述べている⁹⁾。『実際園芸』に掲載された牧野の論考の最初のもは、「園芸家の間違い易き君子蘭の名称」（1-3 1926年12月）であった。したがって、この頃から二人の交流がはじまったのであろう。

石井は牧野富太郎を非常に尊敬していた、というよりむしろ富太郎のことを父親のように慕っていたのかもしれない。二人の年齢差が30歳であるということも関係していよう。石井が全力を注ぎこんでいた雑誌『実際園芸』が太平洋戦争中に廃刊せざるを得なくなったとき、石井は「吾子をいたむ」という文章を『実際園芸』の最終号（1941年12月）に掲載した。そのなかで、雑誌の刊行で世話になった多くの人に感謝の意を表しているが、牧野については「牧野博士には慈父にもまさるお力添えを下さった」という表現を用いて

いる。また、石井は、時局により廃刊となった『実際園芸』に代わって、戦後の日本にふさわしい新たな雑誌を創刊する。『農耕と園芸』である。その創刊号（1946年2月）の1ページ目に、「農耕と園芸」という牧野の揮毫が掲げられている。時に牧野は85歳であった。表紙とは別に、1ページ目に雑誌のタイトルをわざわざ富太郎に書いてもらったのである。依頼した石井の、富太郎に対する敬慕の情はいかばかりであったか。

石井が逝去したのは、牧野が亡くなる4年前のことであった。したがって、石井の突然の逝去による牧野の心境を伝える逸話がいくつか残されている。例えば、牧野は以下のような詩を詠んだ。

君を憶う

在りたりし過去を想えば君はしも、
亡き跡淋びし今日の我が身は
鹿児島へ行きし事など思い出で、
淋びし、懐し、悲しみの痕
叡山に行いて宿りし過去恋いし

これは、1954年（昭和29）に再版された『原色園芸植物図譜』の序にある。方や園芸界の発展に尽力した人物であり、方や日本の植物相の解明に多大な貢献をしてきた人物であり、長年ともに歩んで来た二人のうち片割れが突然亡くなった、その埋めようのない心の空白が痛いほどに伝わってくる。牧野の日記を調べると、鹿児島へともに旅行したのは1932年（昭和7）、また、比叡山にいっしょに出かけたのは1933年（昭和8）、と記録が見出せるが、そのときの思い出を懐かしんでいるのであろうか¹⁰⁾。また、石井が眠る墓には、

自然神之賜
花自然之姿

と縦2行に彫られた言葉がある。津山は、牧野によるとしている。90年あまり、草木を友としつつ植物の研究に一生を捧げた牧野の世界観を示したと言えるような、深い意味をもった言葉である。

先述の『農耕と園芸』で組まれた石井を偲ぶ特集記事では、筆頭に牧野が寄

せた文章が掲げられる。そこには、石井の早すぎる死を悼む言葉と『実際園芸』という石井の最大の功績を称える文章が綴られる。

『農耕と園芸』(8-10 1953年9月)に載る石井の「目新しい園芸植物」は、結果として遺稿になってしまったのであるが、90歳を過ぎた牧野と石井との間で交わされたであろう、ほほえましい遣り取りを彷彿とさせるものである。その遣り取りは、石井が白花のアツザクラを牧野に見せた時のもので、「和名のギンバイザサは、去る7月8日に牧野博士を、お訪ねした時の先生のご命名で、日本に野生のある黄色い花のキンバイザサに似て白花であるところからのご命名である」という内容である。石井のこの訪問は、最後となったのであろうか。

おわりに

二人の交流を示す事柄として、先述した牧野の石井に宛てた書簡に触れておく。繰り返しになるが、約280通の手紙と葉書である。これらを手元に残しておいた石井とその遺族の思いを大事にしたいと考える。書簡の主な内容は、『実際園芸』などに載せる原稿に関するものである。一枚一枚丹念に読んでいくと興味深い事柄が明らかになると思われるので、別の機会に紹介したい。また、『実際園芸』に掲載された牧野の論考も、昭和11年(1936)までは『牧野植物学全集』に収録されているが、それ以降のものはほとんど知られることがない。園芸植物の渡来に関する論考などが掲載され、これらについても調査の必要性を感じている。

最後に、本企画展開催と拙稿執筆に際して、土屋昌子氏、富本美代子氏、箱田直紀氏、目黒美佳氏に大変お世話になりました。末筆ながら、深く感謝申し上げます。

注

- 1) 国立国会図書館は、デジタルライブラリーにてツバキ・サザンカの画像を公開している(画像の閲覧は館内にて可能)。検索する場合、タイトルは「日本産ツバキの

図]で入力。

- 2) 遊川知久「日本と世界を見つめた3人の園芸家(ルイズ・ペーマー 石井勇義 平尾秀一)』『日本植物園協会誌』31号 1997年所収。
- 3) 本稿における引用文について、仮名遣いは現在使用されているものに改めた。
- 4) 石井「山茶の品種解説(1)~(5)』『実際園芸』13-4・6、14-1・2・3 1932年10・11月、1933年1・2・3月、及び「茶梅の品種解説(1)~(3)』同15-8・9、16-1 1933年11・12月、1934年1月所収。
- 5) 山田の生涯については、手掛かりが少なく、『石井勇義 ツバキ・サザンカ』の解説中にある、津山がまとめた「山田壽雄の業績」が唯一の伝記である。それによれば、いつごろから植物図について牧野の指導を受けたかは明らかでないが、その指導によって絵の腕前を上げ、牧野が最も信頼する画工になったとある。そのことを証明するのは、牧野の精緻で美しい植物図で知られる『大日本植物志』(1900~1911年)の「モクレイシ」(第12から14図版)や「オオヤマザクラ」(第15図版)の図を、牧野と共同で描いていることである。また、大正末期に東京帝室博物館が発行したサクラの彩色図は、牧野富太郎指導のもと山田が描いたものである。『牧野日本植物図鑑』(1940年)の図を担当した画工の一人でもある。山田の描いた植物図は、牧野の指導を受けた成果を示すと言ってよい、植物の正確な描き方や完璧としか言いようのない色の付け方が特徴である。その特徴は、山田の非凡さを裏付けるものである。牧野は後年になると、単色ではなく着色の植物図を目指すようになった。その背景には、山田の技術も関与しているのかもしれない。知られることのほとんどなかった山田について、今後、残された作品を展示する機会をもちたいと考えている。
- 6) 山田は1941年(昭和16)に亡くなり、その頃から戦時色が濃くなり、石井の図譜計画は実行できなくなったと考えられる。
- 7) 石井は、大正初期に小田原の辻村園芸で研究生として園芸を学んだ後、千葉県でイシキ・ナーセリーを開いた。そこでの仕事は、主に西洋植物の種子販売であった。その後、『科学画報』や『子供の科学』など科学関係の雑誌の主宰であった原田三夫(1890-1977)のすすめで、石井も園芸に関する執筆をするようになったのであるが、執筆の対象は西洋植物についてであった。
- 8) 注2)参照。

- 9) 原田三夫の『思い出の七十年』(1966年)には、石井との出会いの始まりや、牧野への原稿依頼のことが記されている。それによれば、原田を牧野に紹介したのは恩田経介(1888-1972)であった。恩田経介は、東京帝国大学理学部で植物学を専攻しているので、その折に助手として勤務していた牧野と知り合ったのであろう。恩田は、卒業後、明治薬学専門学校教授、明治薬科大学初代学長となった人物。
- 10) 高知県立牧野植物園『牧野富太郎植物採集行動録・昭和篇』(2005年) 57-58、66頁参照。

※掲載した図の所蔵先

- ・ 図1・3・4は個人蔵
- ・ 図2は国立国会図書館蔵